

音楽

クラシック、ポップス、ロックなどなど、音楽にはたくさんのジャンルがあります。同じ“音”からつくられるその多様な世界観は音楽の大きな魅力の一つです。今回はそんな様々な音楽の奥深い世界に触れられる本をご紹介します。



『楽の匠』

大山 真人著
音楽之友社
760オ
篠崎ほか所蔵

当たり前ですが、クラシック音楽の公演は演奏者や指揮者だけではできません。楽器制作者や音響設計師、恥ずかしながらその存在すら知らなかった写譜屋さんなど、クラシック音楽界を支える様々な職人たちへインタビュー。仕事への誇り、パイオニアとしての苦労、音楽への愛情が伝わってきます。彼らなくしてアーティストは輝けないのです。



『愛の旋律』

アガサ・クリスティー著
ハヤカワ文庫
B933ク
篠崎ほか所蔵

主人公のヴァーノン、子供のころピアノが嫌いだったのですが、オペラ歌手の歌声を聞き、音楽家への道を歩むこととなります。そこにふたりの女性が絡んできます。それぞれとの行く末はどうなるのか、主人公のめざす音ははたしてどんなものなのか、恋愛と成長、そして、ちょこっと作者らしくミステリー色を織りまぜた大河小説です。個人的には、主人公の親友セバスチャンがおいしい味をだして好きですね！



『ドクター・オジーに訊け！』

オジー・オズボーンほか著
シンコーミュージック・エンタテイメント
767オ
篠崎ほか所蔵

“HM(ヘヴィー・メタル)界の重鎮”というよりも“HM界の愉快な人”オジー・オズボーンが、全く参考にならない自身の経験から、みんなの悩みに答えていくという本。意外と真面目に答えていて笑えるが、そもそも相談相手を間違えている。オジーを見ていると長生きの秘訣だけは解りそうな気がする。



『来日ロック伝説 1960's-2000's』

シンコーミュージック・エンタテイメント
764ラ
篠崎所蔵

未だにロック界では、“来日”をマイルストーンとして置くほど日本はある種の“聖地”とされている。「来日後に人気が……」「日本でのライブ盤が……」等、まるで魔法のようだ。(もちろん我々からすれば誇らしいことではあるのだが。)特に初来日時のエピソードや、セット・リストを眺めていると、その場にいなかったことが悔やまれる。



『はじめてのレコード』

レコードはじめて
委員会著
DU BOOKS
760ハ
篠崎ほか所蔵

CDが登場してから急速に姿を消していったレコード。若い世代では実物を見たことがないという方も少なくないと聞きます。この本はレコードを買うところから、聴き方、収納方法、お手入れまで、わかりやすく解説されています。初めてレコードを聴こうと思っている方だけでなく、思い出の曲をもう一度かけてみたい方にもおすすめです。



『世界でいちばん貧しくて美しいオーケストラ』

トリシア・タンストール著
東洋経済新報社
762タ
篠崎ほか所蔵

スラムの子どもたちに音楽教育を受けさせることで、貧困や犯罪などの悪環境から救うプログラム「エル・システム」。この活動から多くの才能あふれる音楽家が誕生し、また国家を挙げてプログラムに取り組んでいるベネズエラのオーケストラ公演は大成功を収めています。本書はその「エル・システム」の活動内容について記録したものです。音楽は人だけでなく社会をも変える。そんな音楽の絶大なパワーを感じられる一冊です。

そのメロディに魅せられて♪

『春の祭典』(『ストラヴィンスキー／「春の祭典」』収録)

サイモン・ラトル指揮 バージン・シティ交響楽団 C1ス08727 篠崎所蔵

タイトルに「春」とついていますが、日本の春をイメージして聴くとひどい目に遭います。近代音楽らしい不協和音から始まり、途中から変拍子のオンパレードという演奏家泣かせの曲。初演の際、あまりに前衛的であったため客席は大混乱に陥ったというわくつきの曲でもあります。それでもはまり込む人は多く、20世紀のクラシック曲の傑作の一つにあげられる作品です。

クラシック初心者にはあまりおすすめできませんが、少し変わったものを聴きたくなってきた方はぜひ挑戦してみてください。



『拍手のルール』

茂木 大輔著
中央公論新社
760モ
篠崎ほか所蔵

クラシックのコンサートに一度は行ってみたい、けれど敷居が高い。そもそもクラシックとはなんぞやと様々な疑問は尽きないもの。そんな疑問にユーモアたっぷりにお答えします。正しい拍手の仕方から、名曲解説までクラシックを楽しく学べる一冊です。



『幻の楽器ヴィオラ・アルタ物語』

平野 真敏著
集英社
763ヒ
篠崎ほか所蔵

老舗楽器店の片隅にひっそりと飾られていた不思議な楽器。それは19世紀、大作曲家に愛されながらも忽然と姿を消した幻の楽器ヴィオラ・アルタだった。当時の音楽家たちが表現しようとしていた音とは、そしてなぜこの楽器が消えてしまったのか……。ヴィオラ・アルタの演奏者として再びこの楽器を蘇らせた著者は、その謎を解くべくヨーロッパに旅立つ……。



『桃山ビート・ドライブ』

天野 純希著
集英社
Fア
篠崎ほか所蔵

時は安土桃山時代、秀吉の治世。天下一の三味線奏者を目指す藤次郎は、笛の名手・小平太、太鼓達人・黒人の弥助、天性の舞姫・ちほを誘い一座を結成します。規則や伝統に縛られず、誰にも媚びることない自由な演奏で庶民を魅了した彼らが、秀吉の政策によって自由が奪われそうになった時、音楽の力で抵抗する——。そんな彼らの熱いビートを感じて下さい。



『誰も知らなかった本当はこわい日本の童謡』

日本の童謡研究会編
ワニブックス
388.9タ
篠崎ほか所蔵

「しゃぼん玉」に秘められた野口雨情の亡き娘への想いや、サっちゃん事故死した話を誰かに聞いてしまうと、夜中に彼女が頭を半分食べにくるといふ「サっちゃん」のこわい噂などなど、本書は童謡にまつわる話やこわい噂を紹介した一冊。読後、子供たちが楽しそうに童謡を歌っているのを聴くと、複雑な気持ちになるのでお気をつけ下さい。